

不登校生の家族支援講演会・福岡

『不登校につながる子どもの困り感』

福岡で「不登校の保護者の会」を設立し、繋がりを通して支え合う関係を築いてきた木村素也氏。38年にわたる教員生活において、不登校の子どもたちとその家族への支援に携わってきた。2014年3月に福岡市立能古中学校校長を退任するも、不登校生への支援を現在も続けている。広域通信制高校 福岡県連絡協議会の設立に尽力し、不登校経験者の進路探しについても環境を整えてきた。

11月7日、福岡ウエディング & ブライダル専門学校（福岡県福岡市博多区）にて、主に不登校生の保護者を対象とした講演会を開催。子どもと保護者、双方の立場を支援してきた立場から、子どもの立場を理解するための新たな視点について説いた。



福岡の不登校家族を支援して 見えてきた“保護者会”の役割

私は2000年から、福岡市内の各地で不登校の保護者が集まる『不登校生の保護者会』を設立してきました。もともと、2014年3月に退職するまでは福岡市立中学校の教員として勤務していきまして、教員生活を通して学校に行けない生徒の進路や生活面のサポートをしていました。どうして『保護者の会』を始めたのかというと、理由はいろいろありますが、「保護者が元気を失うと、子どもエネルギーが出てこない」と痛感したのが最も大きいです。子どもが学校に行けなくなった途端、保護者からも非常に元気がなくなってしまう。それをどうにかしたかったというのが一番の動機です。

保護者だけでなく、子どもたちの活動もサポートしています。不登校を経験した子どもたちの会で、「Fline (フライン)」という会があります。今年の10月31日には、福岡市の警固公園で、福岡青年会議所と協力しハロウィンのイベント企画を行いました。「インフォラータ (道路や広場に花で絵を描くアート作品)」の作成やカボチャの馬車の運行などに取り組み、地域の活動に参加する様子が朝日新聞にも取り上げられました。

学校に行けないというだけで、それ以外はみんな元気です。毎日楽しく送っているし、自分の将来もしっかり考えて、進路も決めている。課題があるとすれば、現在は学校に行くにくいということだけです。そこは無理に学校に行くよりも、学校に行けないことで生まれる「困ったこと」をどのようにフォローしていくのか。つまり、できないことは無理してしなくていい。

その代わりにできることはしっかりやっ払いこうと見方を変えればいいのです。

しかし、学校に行けないというだけで、ほかのことも全部できないとされてしまう風潮は依然として存在しています。悪いことだと思われがちです。子どもたちの活動もスタート時は、新聞に取り上げられる際に自分たちの名前が仮名になったり、顔写真は載らなかったりしました。もちろん顔や名前を出したくない子どももいるでしょうし、それは個人の自由です。しかし学校に行かないことも、そうした活動に取り組むことも、悪いことでは決してありませんよね。学校に行かなくても自信を持っていいのです。どうすればそのようなになっていくのかも含めて、この講演ではお話ができればと思います。

困っている子どもが学校に行くため 先生・保護者ができること

学校に行けないという状況は、例えるなら学校へ続く道に石が積み上がって子どもが通るのを邪魔しているというようなものだと考えています。

石をいくつかでも取り除いてやることできれば、子どもは学校に行きやすくなるのです。石を放置したまま、学校に行きなさいと諭しても、子どもは行けるはずがありません。まずは、どうやってその石を除いてやるかという計画を立てる必要があります。

今年、新聞などで盛んに取り上げられましたが、「夏休み明けに10代の自殺が多い」という問題がありました。夏休み明けは、学校に通いにくくなった子ども



たちにとっても、決して低くないハードルなのです。

私の経験では、サポートをしていた子どもから9月1日の朝の6時過ぎぐらいに電話がかかってきました。話を聞いてみると、「先生、私は戦場に行きます。戦いに行ってきます。」と言うのです。その子どもにとってそれぐらい学校に行くことは厳しい試練というわけです。だからこそ、ヘルメットもかぶせましょう、防弾チョッキも着せましょう、ピストルも持たせましょうというような、戦場に出て行くためのいろんな準備を手伝ってあげる必要があるのです。9月1日を迎えるまでにどれだけの準備をさせてあげるかにかかっています。宿題や休み明けの試験対策、クラスや部活の人間関係などすこしでも具体的な不安をなくし、前に進みやすくしてあげることです。夏休み明けぎりぎりになって学校に行けと言っても、準備の時間が足りません。ぜひ早い段階から動き出してください。

子どものしんどさが高まる「夏休み明け」 早めに取りかかりたい具体的な準備

4月からほぼ通学できていない子どもが、9月1日から登校できるようにするために行ったサポートがあります。スタートは7月の終業式前から。夏休みが始まる前から、夏休み後を見据えて関わっていきました。仮にAくんとして。

Aくんは、まず学校に頼んで夏休みの宿題を先にもらいました。その際一人分ではなく、同じものをもう一人分もらうこと、お願いして解答も先にもらってし

まうようにしました。

夏休みの宿題は、子どもにとってかなり大きなウエイトを占めるものです。しかしずっと学校に行っていないのに、夏休みの宿題を渡されても、すらすら解けるものではありません。結局夏休み中手を付けられず、「宿題ができていないから学校に行けない」とストレスを増大させてしまいます。

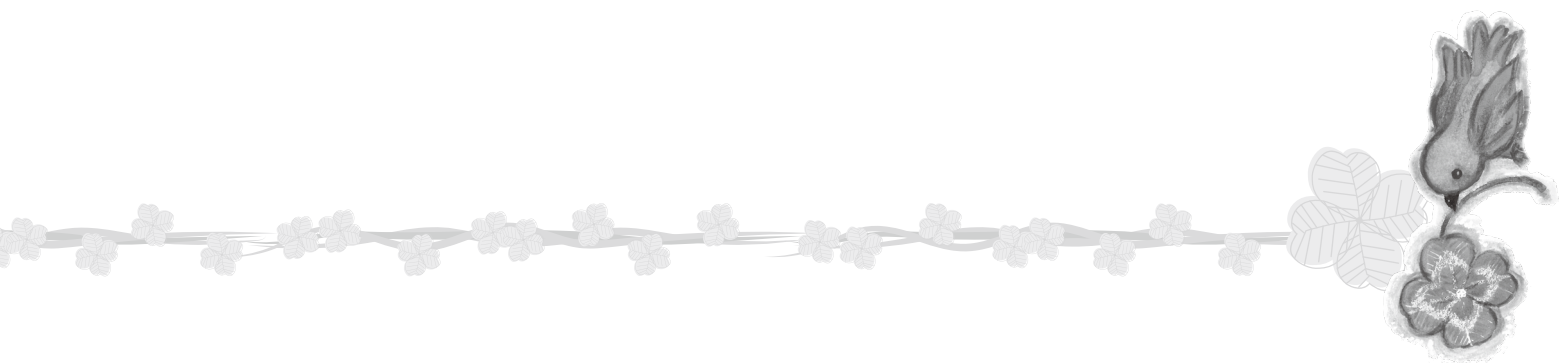
そこで私のとった対応は、「まず答えを写そう。とにかく9月1日に提出できるようにしよう」というものでした。

Aくんは「答えを写すのでは、(宿題をやる)意味がないんじゃないでしょうか」などと言いました。しかし「とにかく写そう。とにかく夏休み明けに提出できるように先に準備して、問題を解くのは後からにしよう」と説得しました。つまり1冊は書き込んで提出用、もう1冊は提出用を片付けた後にゆっくり勉強する自習用ということにしたのです。そうすればとりあえず「宿題は済ませた」という安心感を得られます。この場合は実際に学力が向上したかどうかは大きな問題ではありません。少なくとも宿題という石は取り除かれた、これが大切なのです。

さて、9月に入って学校に行くことができても、またすぐに大きな困難が立ちふさがります。新学期に入ってすぐ、学科試験がありますね。

全然学校に行ってなくて、勉強もわからない。ましてや、もともとは周囲より良い成績をとっていたのに、休んでいる間に追いつけなくなってしまったという子はプライドに苦しめられます。この試験についても、夏休みの宿題と同じく早めに準備をしておくことで切り抜けることができます。

Bさんの場合は、夏休みの間、個別指導塾に行きま



した。家庭教師という選択肢もありましたが、Bさんは人が家に来るのは嫌だったとのこと。ただ問題は、夏休みは大勢が夏季講習に来るとのこと。知り合いや同年代の目は、学校を休みがちの子どもにとっては避けたいものです。

そこで部活がある時間帯を狙い、午前中に通わせてもらえるよう塾に話をつけました。午前中に勉強をさせてもらって、昼には帰る。気になる人の目は避けながら、試験への不安を片付けていくことに成功しました。

人間関係を築くのが苦手という子は、夏休み中にコミュニケーション能力の訓練です。野球が好きな友だちを誘って、共通の趣味である野球観戦に行く。アニメに興味がある子は、好きなアニメを扱ったイベントに行く。近いところ、好きなところから少しずつ人

と交流するきっかけを探します。

些細なことに思えるきっかけ 背景にあるのは蓄積した困り感

さて、子どもは何で学校に行けなくなるのかというと、一言で言えば「何らかの“困り感”を抱えている」からです。一体何を困っているのか。それを突き止める必要があります。困っているから行けないのです。

でも、学校に行けない理由を聞いたときに、「よくわからないけど、とにかく行けない」とか、理由がはっきりしないケースは少なくないですね。もしくは、些細な理由を言う——友達がこんなことを言うとか、あ



いつが消しゴムを投げてくるとか、大人はそれだけで何で学校に行かなくなるんだらうかと思わずにはいられないような理由です。

この場合の不登校は、子どもが様々な“困り感”を積み上げてきた結果として現れています。日常的に小さな苦痛をたくさん積み上げ、コップに水がどんどん注がれるように溜めてしまった。そして最後の一滴を注いだことで、がばーっとこぼれてしまった。この一滴だけが不登校の原因と見られがちなのですが、実はその前にずっと溜め込んできた“困り感”が背景にあるのです。

それでは、どんなことに子どもは困ってきたのでしょうか。そして、子どもがずっと困り続けてきたことに、なぜ周囲は気付かなかったのでしょうか。

一つひとつの出来事は、実際大したことではなかったかもしれませんが、ただ、そのストレスがずっと蓄積されてきたことに問題があります。

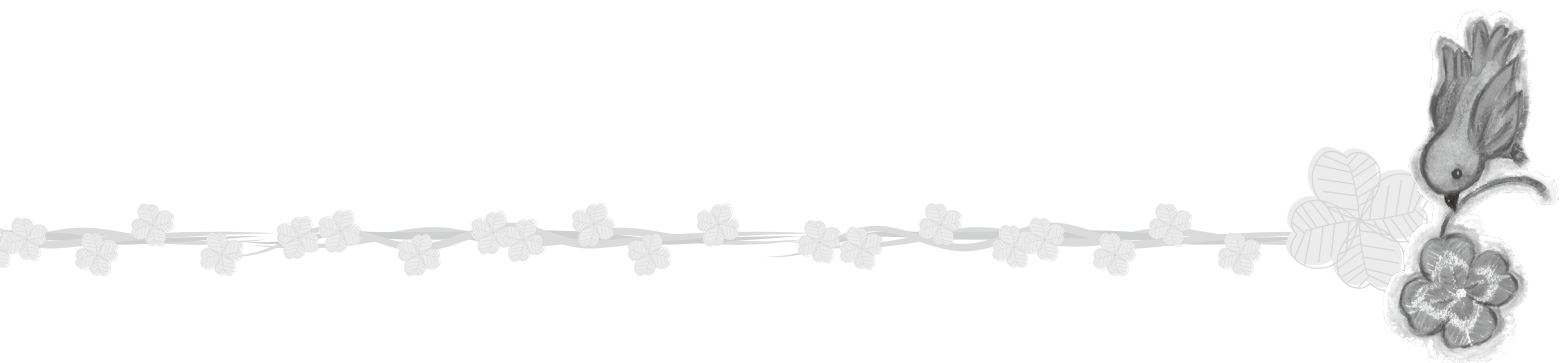
先生に言えない理由は何だろうと思われませんか。例えば友人同士のいざこざがあったとします。弱い立場になったほうが、先生に相談に行く。そうしたら先生は相手の子を呼んで怒った。怒られた子どもは、そのときは「はい」と言ったけれども、実は納得できていない。「お前、チクったろう」と言われて、また自分はいじめられる…。そんなふうには想像するから、もう最初から相談しません。なぜそういう想像をするかというと、そういう経験が既にどこかであるからです。だから言わない、溜め込んでしまう、漠然とした不安感が限界を迎えるという流れになります。

子どもが嘘をつく、適当なことを言う 実は当たり前なこと

私は不登校の子どもに、まず理由を聞くところから始めます。言う子どももいますし、言わない子どももいます。言わない子どもはわかってもらえないと思って言わないか、もしくは自分でもうまく説明できない子どもです。

自分のことを説明できないと、適当なことを言うてしまうことも少なくありません。学校に行かないと言って、理由が言えないと周囲は納得しない。保護者も先生も問い詰めてしまう。でも当人は自分でもわからないものだから、その場しのぎに適当なことを言う。親はそれをまともに受けて、例えば先生に「『〇〇ちゃんにいじわるをされた』と言っていました」と言いに行く。先生は原因とされた〇〇ちゃんを呼びます。そして〇〇ちゃんと話し合い、学校に行けない子に謝罪させて、解決したということにしてしまいます。しかしそれは学校に行けない本質的な理由ではないので、やっぱり状況は変わらない。

子どもは基本的に嘘をつくものです。大人は、嘘をついたことを問題にしないことです。嘘をついたと糾弾するのではなく、なぜ嘘をつくのかという点に注目してみてください。自分を守るため、必要に迫られて嘘をつくのです。そこには必ず何か困っているポイントがあり、解決する手助けがうまくできれば、もう嘘なんてつかなくていいのです。



将来を考えて我慢する大人 今が一番大切な子ども

「何で学校に行くの？」

「何で勉強をしないとイケないの？」

こんな質問を子どもから受けて、言葉に詰まる先生や保護者は少なくないのではないのでしょうか。

大人がつい口にしがちな「将来いい生活をするため」という答えでは、子どもは納得しません。子どもは将来よりも今を生きる存在です。今が楽しいかどうか、それが子どもにとっての最大の判断基準です。将来のことなど考えられないのが普通です。親や周りの環境から、将来のためにいま頑張っておかないとイケないと刷り込まれ、「今頑張らないと大変」なんて思い込んでいるだけです。

大人はそれまでの成長過程でさまざまな経験をしています。多くの人とも出会っています。子どもはそんな経験はしていません。小学校の子どもに「将来何になりたい？」と聞いても、「花嫁」とか、「花屋さん」「野球選手やサッカー選手」とかそんなものです。非常に狭い経験で、狭い情報の中で物事を判断しているからです。それがだんだん世界が広がって行って、いろんな経験をしていくことによって、一般社会常識と同じような価値観や考え方が形成されていきます。

中学生、高校生ぐらいになると、半分大人になりかかった考え方で、自分自身に対するプレッシャーに苦しんでいます。そしてもう半分の子どもの部分では、とにかく現実から逃げたくて、今楽しめるゲームにのめりこむ。


こういう子どもたちに何か決めろと言っても、決めません。何で決めないのか。それは時間が来るのを待つ

ているのです。時間が過ぎれば、周囲が決めてくれるのを経験的に知っています。中学校3年生が終われば、自動的に卒業できる。その後どうするのか、周囲は決めさせようとしています。でも黙っていれば、誰かが決めてくれる。もしくは決まってしまう。そうすることによって自分の責任を回避する。

本人が将来どうしたいのかを本当に真剣に話し合う必要があります。困っていることがあるのなら、本人の都合に合わせてくれる学校を選べばいいのです。

子どもの困難を取り除いてやるのは、「甘やかしているんじゃないか」と思う人があるかもしれません。しかし、できることをそのままさせることというのは決して教育ではありません。できないことができるようになっていくことこそが教育なのではないでしょうか。学校のルールが守れないというんだったら守るようにしたらいいんじゃないかということです。それを今すぐにはできないからこそ、周囲は配慮する必要があります。

枠からはみ出してしまった子どもを排除するのではなく、枠をちょっとでも広げて、中に入れるよう支援してください。そしてできるところから徐々に取り組みるようにしていけば、最終的にはみんなと同じことができるようになる。教育ってそんなものじゃないですか。私はそう感じています。

 編集・構成 学びリンク



木村 素也 の著書

不登校支援の輪をつなげよう

～「不登校生の保護者会」を通して学んだこと～

不登校の家族支援のヒントが満載！
元中学校校長がお母さんのために書いた本

「どうにかして来させてください」という学校。
「学校には行けない…」という子ども。
「学校に行きなさい！」という保護者。
これでは三者三様、自分の都合を述べるばかりで、いつまでも苦しいままです。お互いの立場を知り、考え方を変えれば、新しい解決策が見えてきます。
元中学校校長の著者だから見える、学校と家庭、親と子の適切な関係作りを示します。「スクールカウンセラーとの付き合い方」「医者に求めていること、求めてはいけないこと」など、不登校家庭の具体的な困りポイントを解決します！
また、我が子を理解するために必要な大人の心構え、子どもとしっかりコミュニケーションを取るためのコツなどを掲載。
38年間にわたる、何百人ものお母さんから寄せられた「木村先生、うちはこんなことで今困っています」「だったらこうしてみてもはどうですか、こう考えてみたら良いんじゃないですか」こんなやりとりから生まれた、すぐに役に立つノウハウと家族の気持ちが楽になる考え方を示します。

- | | |
|----------------|-------------------------|
| ■著者：木村 素也 | ■発行：学びリンク |
| ■定価：1,200円＋税 | ■ISBN：978-4-902776-88-1 |
| ■体裁：四六判 172ページ | ■2014年12月発売 |



【プロフィール】

1953年4月福岡県福岡市生まれ。
2014年3月に福岡市立能古中学校校長を退任するまで38年間にわたって福岡市の公立中学校教員を務める。
福岡市立中学校の教員として、学校に行けない生徒の進路や生活面の支援及び保護者の情報交流の場作りを目指して活動。
2000年から始めた『不登校生の保護者会』による不登校支

援の活動は福岡で根付いている。現在、「ぼちぼちの会」会長として各保護者の会と連携しながら不登校生の支援に関わっている。2014年、『不登校支援の輪をつなげよう～『不登校生の保護者会』を通して学んだこと～』（学びリンク）を上梓。
趣味は園芸やイラストなど。